

2013年 3月14日・週刊きたかみでは

二階堂晃子詩集『悲しみの向こうに』発刊

奪われた故郷に思い寄せ

詩集「悲しみの向こうに一故郷・双葉町を奪われて」は3日11日付で発刊。詩人は福島県在住の二階堂晃子氏。双葉町が実家。福島第一原発の立地町で3.5キロしか離れていない。放射線汚染で壊滅状態になった。

一章「悲しみの向こうに」13篇は一切が原発事故関連作品。双葉町に住む姉夫婦の証言など、震災、津波、原発の生々しい事実が胸を打つ。メルtdownの「非日常」がなお続いている現実があり、詩篇のすべてが身近な人たち。以前の原発設置の経緯も明確になる。県内でも、浜通りと中通りの被害後の認識に軋轢を生じるが、狡猾な背景も表している。

かつて小学校の教え子が原発テーマの卒論を送り、危惧を明晰にしたが、30年後に現実化した面も理解できる。

いま、立ち上がろうとする住民。とはいえ、『悲しみの向こう』にはまだ何も明かりは見い出せない。しかし悲しみをそのままにしておいては、生きる力にならない。(略) 存分に書き残すことが、今、私がなすべきことと思うようになった』と書いている。

二章は父親の死、母の介護で双葉町への帰郷の作品10篇。三章は教職を終えてから、現在も務めている学校心理士としての作品群篇を収録した。

「大震災後普通の生活が一変／詩とは何か、生きるとはを突きつけられる／作り言じゃない言葉の力に息をのむおもい／紛れもない人間の本物の声書かれている／感動に心がふるえる」と詩人・細谷節子氏が帯に言葉を置いた。

二階堂氏は1943年双葉町生まれ。福島大学学芸学部卒業。公立小中教員後、学校心理士。詩集「ありんこ」、共著「絆 伝えることの大切さ」(福島県作文の会朗読グループ)など。同県現代詩人会会員。「山毛櫨」同人。

と紹介されています。